

児童館の ふれあい遊び

〔こどもの城〕では、昭和60年（1985年）11月の開館以来、体育・造形・音楽・映像科学などの、専門性を生かした〈あそび〉から、レクレーションゲームなどの仲間遊び、乳幼児親子のための子育て支援など、主に〈あそび〉をとおして、子どもたちがすこやかに育つためのお手伝いをしてきました。

子どもにとっての〈あそび〉は、大人が考える以上に大切なものです。そこには、子どもたちが豊かに育っていくために必要な“栄養”がいっぱいつまっていますからです。〔こどもの城〕での実践経験を生かして、多くの児童館の活動に活用できる「遊びのプログラム」を紹介します。

いろいろな年齢の子どもが集う児童館から 〈あそび〉とおして人間関係を豊かに

〈あそび〉をとおして、子どもたちはいろいろなことを身につけ、世界を広げ、豊かにのびやかに育っていきます。

何人かが集まって〈あそび〉をはじめるとき、みんなが楽しく遊べるように、自然とルールが生まれます。敷地の外に出てはいけない、建物の裏側に行っちゃいけないなどの“決めごと”を自分たちで作ります。仲間との約束です。他者との関係が意識されています。

児童館には年齢の異なる子どもたちが集まってくるので、大きな子ども小さい子ども一緒に遊ぶこととなります。学年別で遊ぶことが多い小学校とは違う、年齢が入りまじった子どもの集団です。一緒に遊んでいると自然に、小さな子どもはお兄さん・お姉さんにあこがれて目標にするようになり、大きい子どもは小さい子どもをいたわるようになります。

携帯ゲーム機の普及などで、一人（あるいはネット上の見知らぬ人と）で遊ぶことが増えています。生身の人と人とが、けんかをしたり仲直りをしたり、ぶつかりあって遊ぶことが少なくなっています。兄弟姉妹が少なくなっている今、年齢の異なる子どもと一緒に遊ぶ機会はこれまで以上に大切になっています。

幅広い年齢の子どもや地域の大人が集まる児童館・児童センターだからこそ、いろいろな人が出会い、ふれあいを深める〈あそび〉ができます。〈あそび〉をとおして、子どもたちの世界をを広げ、子どもの豊かな〈育ち〉を支えていければと思います。

● 〈あそび〉のなかで身につけるものは多い たくさん遊ぶことが豊かな“育ち”に

〈あそび〉のなかから、子どもたちが身につけていくものはたくさんあります。みんなが楽しく遊べるように自分たちでルールを決めることは、大人社会の“規則”作りにつながるものです。お兄さんお姉さんを目標に、“できるようにになりたい”という思いは向上心の現れです。小さい子どもへ配慮する姿からは“おもいやり”の芽生えを感じます。

生きていく上で必要なこれらの力を、教える（教わる）のではなく、自然に身につけられるというのが、〈あそび〉が持っている大きな力です。たくさん遊ぶことが、豊かな“育ち”につながっていくのです。

人と人とのつながりが薄れがちな今、〈あそび〉をとおして人とのふれあいを体験し、人とのふれあいのすばらしさ、楽しさを知ることが、これまで以上に大切になっています。幅広い年齢の子どもたちや地域の大人が集まる児童館こそ、〈あそび〉をとおしてさまざまな人やものとふれあうことができる、数少ない場所になっているのではないのでしょうか。

● 親と子、親子と親子のふれあい それぞれの世界を広げていく

母親の胸に抱かれてすやすや寝ている赤ちゃんは、約1年で、寝返り、はいはい、つかまり立ち、そして一人で歩けるように成長します。親子のコミュニケーションも、泣き声や表情から赤ちゃんの状態を察することからはじまり、6～7か月ごろには、おもちゃを握って音や動きを楽しむようになります。9～10か月になると、「ワンワンがいるね」など親子でひとつのものに興味を向けることができる（共有）ようになります。1～2歳になると子どもの行動も大きく変化してきます。“イヤイヤ期”に入り、親も子どもとの接し方に頭を悩ませます。

乳幼児のころは、親が支える形で子どもの外の世界が開かれていき、成長とともに、一方的なコミュニケーションから互いの気持ちが通じ合えるコミュニケーションになっていきます。

乳幼児親子を対象としたプログラムでは、家庭で孤立しがちな子育てから離れて、いろいろな親子とふれあいながら、ほっとできるひとときを提供するようにしています。それは、親と



イラスト：いがき けいこ

子どものかわり、親同士あるいは子ども同士がかかわれるようにして、人と人がつながる楽しさを感じてもらえる“子育て支援”プログラムといえるものです。

3～5歳の幼児になると、親と子の関係だけでなく、並んで順番を待つ、交代でおもちゃを使うなど、自分以外の人（他者）を意識した行為ができるようになります。

幼児の親子遊びのプログラムでは、親子のふれあいだけでなく、子ども同士のふれあいをとおして、人との付き合い方を学べるようにしています。親と子の関係から、子どもと子どもの関係へと広げていけるように、プログラムの組み立て・進行を工夫します。

□子どもの空想力□

幼児期には、現実の生活とは別に、想像する力が発達します。“ごっこ遊び”が大好きなころです。家族ごっこ、戦いごっこなど、いろいろな役を演じるようになります。

心のなかのさまざまな感情を、人形や動物になぞらえたストーリーで感じとることができるようになり、絵本や人形劇などに興味を示します。幼児期の子どもは、“空想”のなかで遊び、学んでいきます。心の動きが自由で、豊かな発想力が育ちます。

小学生になると、客観的な思考力がめばえてくるので、〈あそび〉の種類も変わってきます。

●〈あそび〉による子どもの育成 意図を持って“援助する”ことが大切

児童館には、乳幼児から小・中・高校生まで、幅広い年齢の子どもたちが集まってきます。同じくらいの年齢の子ども同士で遊ぶこともあれば、入りまじって遊ぶこともあります。小学校などでは、クラスや学年の単位で同年齢の子ども同士が遊ぶことが多いので、異年齢の子どもたちが遊ぶ児童館は貴重な存在といえます。

●異年齢の子どもが集まる 児童館ならではの他者との“ふれあい”

「遊びによる子どもの育成」をはかる児童館には、小学生だけではなく、中・高校生、乳幼児を連れた親子、ときには地域の人たちも集まってきます。いろいろな人と出会えるのが、児童館の特色のひとつといえます。

多様な人が集まる児童館における〈あそび〉は、“人と人のふれあい”がひとつのテーマになります。少子化・核家族化がすすみ、自分以外の人（他者）と接する機会が少なくなっているなかで、いろいろな出会いが期待できる児童館の存在が重要になっています。

いろいろな人が集まって構成されている社会では、互いを認め、尊重しあいながら生きていくことが、これまで以上に重要です。他者を理解するためにも、人やものと出会い、ふれあうことの経験を積むことができる、〈あそび〉の役割は大きいと思います。子どもたちにたくさんの〈あそび〉を体験させることが、豊かな人間を育てていくことにつながると考えるからです。

健全育成を担う児童館では、〈あそび〉のなかに、どのような“ふれあい”の機会を設けていけばよいかを考える必要があると思います。乳幼児親子、幼児、小・中・高校生など——対象にあわせて、どのような“ふれあい”が大切かを考え、工夫することが要求されます。同じ〈あそび〉でも、プログラムの進め方を変えることで、いろいろな“ふれあい”を作り出すことができるからです。

〈あそび〉をとおして、人と人との関係が広がっていくと、地域の活動にもつながっていきます。多くの人が集まれば、役割を分担することも必要になります。人と人との関係が具体的な形になっていきます。〈あそび〉をきっかけに、子どもたちの世界を広げていくことができます。



●バラエティに富んでいる〈あそび〉 “ふれあい”の形もいろいろあります

〈あそび〉には、いろいろな種類があります。静かに遊ぶものもあれば、元気いっぱい体を動かして遊ぶものもあります。一人で楽しむものもあれば、みんなが集まって遊ぶものもあります。同じような遊びでも、地域によってルールが違っていることもあります。逆に、少しぐらいルールが違っていてもだれもがすぐに仲よく遊ぶこともできます。

〈あそび〉のなかでは、けんかをするものもあれば、仲直りすることもあります。自分の力をうまく発揮したり、じょうずに

□児童館の活動内容□

「児童館ガイドライン」のなかの「児童館の活動内容」の第一にあげられているのが「遊びによる子どもの育成」。具体的には、“子どもが遊びによって心身の健康を増進し、知的・社会的能力を高め、情緒を豊かにするよう援助すること”と“子ども同士が同年齢や異年齢の集団を形成して、さまざまな活動に自発的に取り組めるように援助すること”の2点があげられ、児童館の活動における〈あそび〉の大切さが述べられています。

同時に、“援助すること”という言葉に、漠然とした〈あそび〉ではなく、なんらかの意図をもった〈あそび〉が浮かび上がってきます。楽しい、おもしろいという〈あそび〉のなかに、子どもたちに感じとってほしい・体験してほしい“なにか”が必要なのではないのでしょうか。

表現・主張して伝えたりすることができることもあれば、うまくいかずにめげることもあります。しかし、〈あそび〉のなかなら何回もチャレンジすることができます。

仲間がいれば、一緒に遊ぶことの楽しさや力を合わせて協力することのうれしさ、みんなでわかちあうことの喜びなど、一人ではできないことを経験できます。一人ひとり異なる個性を持った仲間が、互いに認めあい尊重しあうことの大切さを身につけることができます。

種類も遊び方も、楽しみ方もバラエティに富んでいることが〈あそび〉の魅力といえます。〔こどもの城〕でも、それぞれの部門の専門性を生かして、遊びの種類、さまざまな年齢にあわせた遊び方などを開発して実践してきました。体を動かす遊びもあれば、ものを作ったり、みんなの前でパフォーマンスをして自分を主張する遊び、仲間と楽しむ遊びなどさまざまです。

●親と子、子どもと子ども、家族と家族 人と人との関係が広がっていきます

〈あそび〉の種類がたくさんあると同じように、“ふれあい”にもいろいろな形があります。たくさんの人と直接ふれあうこともあれば、作ったものや自分の意見を他の人に見せたり・伝えたりすることでふれあうこともあります。

“ふれあい”の相手もさまざまです。男もいれば、女もいます。運動がとくいな人もいれば、音楽が好きなの、絵が上手な人もいます。背が高い人もいれば、太っている人もいます——一人ひとりが個性をもっています。

親と子の“ふれあい”、子ども同士の“ふれあい”、家族と家族の“ふれあい”——というように、“ふれあい”の輪を広げていくことが必要です。“ふれあい”を積極的にすすめることもあれば、静かに見守ることもあります。〈あそび〉のなかには、たくさんの“ふれあい”の機会があるので、いろいろな形があることを意識しながら、人と人とのかわりが広がっていくように“援助する”ことが大切だと思います。

子どもたちは、多様な人との、多様な“ふれあい”をとおして、自分以外の存在（他者）を理解していきます。同時に、他者とのかわりのなかで自分自身を確認して成長していきます。〈あそび〉をとおして“ふれあい”、“ふれあい”をとおして世界を広げ、大きく成長していきます。

●年齢・対象にあわせてアレンジする

〔こどもの城〕に遊びにくる人は、乳幼児を連れた親子から、小・中・高校生まで幅広いので、それぞれの人が楽しめるように〈あそび〉も工夫されています。主となる対象年齢を想定していても、大きい子や小さい子と一緒に集まってきます。大きい子には自分で考える機会を多くしたり、小さい子には保護者にも参加してもらったりして、幅広い年齢の子たちが楽しめるようにしています。

長年にわたる実践のなかで、限界はありますが、同じプログラムをいろいろな対象にあわせてアレンジするノウハウも身につけてきました。『児童館の活動に活用できる 遊びのプログラム』のなかで、そのノウハウもふくめて紹介していきたいと思っています。